「障がい者だからって、稼ぎがないと思うなよ。
～ソーシャルファームという希望」発売のお知らせ

クローバーの会の皆様へ。
お話させて頂いた事がある方や、宴席をご一緒させて頂いた方も、そして勿論 始めましての方も…長きに亘り活動される会のHPに拙著の情報を掲載頂き、感謝申し上げます。
私は、2015年『ダウン症って不幸ですか？』(宝島社)という本を上梓しました。自分にはダウン症のある子どもがいなければ、兄弟や家族にもいない。「そんな自分がダウン症の本など書いていいのだろうか？」と執筆中に何度も悩みました。その懊悩はこれからも消える事は無いと覚悟しています。
だが同時に、「当事者家族ではない姫路さんだから、この本を書けたのだと思う」とご家族や支援者の方から、沢山の暖かい言葉を頂きました。本当に嬉しかったです。

当事者ではない自分のような人間でも、次に伝えるべき時象や役割が、まだ何処かにあるのだろうか…。思慮を巡らせて辿りついたのが【働く事と自立】でした。
皆様の方が現状をご存じかと思いますが、障がい者雇用の現実は、【一般就職】への門戸は険しく、【作業所】においても1ヶ月の“工賃”は低収入が常態化しています。そんな無愛想な壁として立ちはだかる僅かな選択肢に対し、第三の働く形として輿望を担うのが『ソーシャルファーム』という形態です。ビジネスの視点を取り入れる事で、障害に関係なく市場と同等の給料を保障する。欧州ではレストラン・カフェ・ホテル等、幅広い業種で1万か所以上が存在していますが、日本では名称の認知度さえ低いのが現実です。今回、日本で数少ない団体を取材させて頂き、新潮社より『障がい者だからって、稼ぎがないと思うなよ。～ソーシャルファームという希望』という刊行するに至りました。
●舞鶴市にあるフレンチレストラン「ほのぼの屋」
年間1万人以上が訪れ予約が取れないと称されるこの店の出発点は、支配人・西澤心さんが感じた「同じ人間なのに働く事の格差がある事への疑問」でした。障害者施設で支払われる“工賃”の少なさに肝を消し、障害がある仲間達と共に作った理想の店です。
そんなほのぼの屋で、誰もが口にする言葉があります。
『2万円で仕事ぶりが変わる。5万円で生活が変わる。8万円で未来が変わる。10万円で働き方が変わる』
給料で初めてジーパンを買う。おしゃれに目覚め、身だしなみや清潔感を気を付けるようになる。すると飲みに出かけるなど、スゴロクを進むように生活圏や人生観

が変化していったと言うのです。「5万円」を1つの節目として生活の幅が広がり、「8万円」を越え出すと結婚、1人暮らしと夢や人生の展望を語る余裕が出来る。大台「10万円」に辿り着くと、“お金を貰っている責任”から、お客様の為に働くという悟性が息吹き始めました。

●2億円を売り上げる滋賀県大津市のクッキー工場「がんばカンパニー」。

●60年代から“障がいがある仲間の為に”と走り続け、巨大なワイナリーを手掛ける「AJU自立の家」。

●障害者とアートという視点からボーダレスミュジアム「NO－MA」や、作家・古久保憲満さんご家族など、沢山の方々からご意見を伺いました。

日本の福祉の世界では儲けが度外視され、利益を上げる事に対し嫌悪感や忌避感を抱き“金儲け＝悪”と汲み取る人間が少なくありません。だが、利益あればこそ改善できる暮らしもあり、給料を得る事で『社会に認められた』と感じる障害者も多いはずです。家族を養い、子どもを授かり、働く喜びと誇りを持ち、新たなステージで人生を歩み始める人たちも大勢いるのだと、改めて強く感じました。

※最後に…この所懐は作中には記しませんでしたが、就労と自立をテーマに書こうと思い至ったのには、もう1つ理由があります。

ダウン症がある方や　そのご家族と時間を共にする中、青年期を迎えたダウン症のある方に関して「生活能力がパタッと落ちる」というエピソードを、幾例も聞かされた事です。「もっと何かしてあげれたのかなぁ…」「気づいてあげればよかったなぁ…」。先月まで、先週まで、昨日まで出来ていた事が突然できなくなる、話せなくなる…その現実を前に、目頭を熱くして悔しさを滲ませるご家族の姿を、何度も拝見しました。

自身、ダウン症のある方は「ゆっくりだけど必ず同じように成長する」と解釈しています。しかし、養護学校を卒業して青年期を迎え、作業所と自宅の往復で　大切な“学びの場”が、少なくなっている、という現実があるようにも強く感じています。地域に1つでもソーシャルファームを意識した場所が増えれば、選択肢も増えて自立への心構えも生まれるのでは…。さすれば、愛する我が子の事で、自分自身を責めてしまう親御さんが1人でも減るのでは…。それが、この本に込めたもう1つの大きな願いです。

『ダウン症って不幸ですか？』『障がい者だからって、稼ぎがないと思うなよ。』2冊の本のタイトルは読者の皆様への問いかけでもあります。1人1人の力は微力でも、決して無力ではありません。その一歩が大海に一滴を加え、一隅を照らす『福音』になると、僕はずっと信じています。その答えと共に、理解と笑顔が広がる事を願ってー。

姫路まさのり